ARPAK・NEWSLETTER

アルパック ニュースレター

VOL146　2007年11月1日 ISSN 0918-1954

茅葺きの最後の仕上げ（本文中に関連記事があります）

目次／contents

人・まち・地域…… 2
- マンション居住者に町内会加入を呼びかける「せいいつ方式」の策定／石本幸良
- 第2回「ものづくり日本大賞」 が発表されました～／高野隆嗣・松田剛
- 子ども向けエコ住宅ガイドライン／福井秀樹

きんきょう…… 8
- アルパック40周年記念事業「アルパック・タグボート・フォーラム」のご案内
- 第3期SAS（ソーシャルアクションスクール）開講／田口智弘
- 「我々のふるさと、ここにあり！」We are here! ／森岡武

まちかど…… 12
- 今、小金井が面白い参加を期待～井戸を掘り、お地蔵さんを街なかに設置　／黒崎晋司

Like a Tugboat ARPAK

マンション居住者に町内会加入を呼びかける「せいいつ方式」の策定

京都事務所／石本　幸良

京都市上京区の成逸（せいいつ）学区において、学区内で発生する新規マンション建設に伴う様々な問題解決と、既存の地域コミュニティとマンションの協働による適正な地域運営の展開の再構築に向け、「**せいいつ方式**」を策定しましたので、報告します。

成逸住民福祉協議会

成逸学区は上京区の堀川通寺の内の西側、西陣の北部に位置します。人口は約2800人、世帯数1400世帯弱、高齢化率24.6％の小規模、高齢化の進行した学区です。成逸学区では学区社会福祉協議会（ボランティアの住民自治福祉活動団体）として昭和48年に設立の「**成逸住民福祉協議会**」（以下成逸住協）を中心に活動を展開しています。成逸住協は住協本部、学区内の町内会（26ヶ町）、各種団体（20団体）で構成され、地域に密着したきめ細かな福祉を目指して活動しています。

成逸住協と私のゼミ活動の交流

私と成逸学区の交流は平成12年に私が立命館大学の産業社会学部でゼミを担当することとなった時からで、以来、3期のゼミ生が成逸学区の活動から社会に巣立ちました。ゼミ生の活動は成逸住協の定例会議への出席と成逸夏祭りへの参加からでした。学生作成のお化け屋敷は夏祭りの目玉事業として4年連続で実施しました。また、女性会主催のお年寄りの交流会「いきいきサロン」への参加や、学生主体で、お年寄りを対象に困りごとのお手伝いをする「**成逸お助け隊**」を発足させ、最初の取組として自主防災、消防署と協力して独居老人宅の地震時の寝室の家具転倒防止の取り付けを行いました。現在4期生と5期生でゼミ活動を継続しています。

成逸まちづくり推進委員会の設立

成逸学区内においては近年ワンルームマンション建設の動きが急激に増加しています。市内の大学キャンパス再編による学生の増加や景観規制の強化に伴い、分譲マンション建設から賃貸マンション経営への転換などが要因と言われています。

このような土地利用の変化、特にマンション建設の増加に伴い、既存の町内会活動の停滞が懸念され、既存のコミュニティと新しいマンションのコミュニティの関係形成に対する不安が高まっています。

成逸住協では近年のこのような新しい居住形態及び新規の居住者が増加する中、多様な学区のまちづくりに対応するため、多様な立場の学区民の協力のもと、成逸学区に住み、働き、訪れる、だれにとってもここちよいまちを維持、発展することを目的に「成逸まちづくり推進委員会」を平成19年4月に設立しました。私は専門委員として参加しています。委員会では当面の課題として古くから住む住民と既存マンションあるいは新築マンション等の居住者が町内活動等を通じてうまく関わりができるようなルール作りから取組を開始しました。

「せいいつ方式」の策定

委員会ではマンション居住者、特に増加しているワンルームマンションの町内会加入に向けて協議を重ね、数ヶ月に及ぶ委員会の協議の結果、この10月に、学区内で発生する新規マンション建設に伴う様々な問題の解決と、既存の地域コミュニティとマンションの協働による適正な地域運営の展開の再構築に向け、「**せいいつ方式**」を委員会で作成し、成逸住協で町内会長への説明と協議を行い、この10月に策定し、住民に公表しました。

《1》せいいつ方式の内容

●せいいつ方式の目的

「せいいつ方式」は学区内で発生するマンション建設に伴う様々な問題の解決に対応するために、すでに地域で活動している町内会と、新しいマンションの住民の方やマンションの組合との間で、日常的に良好な地域運営を図るために、両者の合意のもとに締結する「成逸学区のまちづくりルール」です。

●せいいつ方式にまとめている内容

せいいつ方式では以下の項目について、成逸学区の基本方針を示し、関係する学区民の方への理解と協力をよびかけています。

①学区内で新しくマンション等を建設する場合の、建設時期および管理における関係者の協定事項

②マンションの町内会加入についての基本ルール

《2》マンションの町内会加入について

●学区内のマンション居住者の方はマンションが位置する町内会に加入していただきます。

ワンルームマンション居住者の方は日常的な町内会活動への参加は難しい面もあると思われ、町内会に「準会員」として入会していただきます。

●マンション町内会で独立する場合

現在の成逸学区内の町内会の規模は平均30戸程度です。マンションの規模によっては既存の町内会の会員数を上回ることも予測されますので、その際には両者協議の上、マンション町内会として独立していただき、住民福祉協議会に入会していただくことができます。

《3》準会員の定義

準会員とは、ワンルームマンションの居住者などを対象に、町内活動には直接参加しませんが、住民としての情報提供を受け、地域住民の一員としてのコミュニティに参加することができる会員です。

- 長年続く町内行事への参加や総会における議決権や役員の被選挙権、選挙権はありません。
- 町内役員等の役割は分担していただきません。
- 市民新聞等の官公庁の広報の提供、成逸住民福祉協議会、各種団体の行事の情報提供をうけ、その行事に参加することができます。
- 地震等の災害避難時には地域自主防災会の互助支援活動による支援を受けることができます。

《4》マンションの町内会会費の徴収について

●マンションの方の会費の納入方法

町内会費の納入は個々の家庭が責任をもつことが原則ですが、徴収については町内会役員の方の大きな負担となっています。そこで、マンション住戸のみなさんにはマンションの管理組合または管理会社から町内会への一括納入を基本としていただきます。

●ワンルームマンションの会費の納入方法

準会員となるワンルームマンション住戸については、マンション住戸数の1/2以上の戸数分の町内会費を管理会社を通じて町内会へ一括納入していただきます。

《5》既存マンションへの展開

このせいいつ方式はこれから学区内で新しく建設するマンションから適用していきますが、既存マンションにおいてもこのルールが適用されるように関係者のご協力により、成逸学区の基本ルールとして確立していきます。

せいいつ方式の今後の展開

今回提案した「せいいつ方式」は成逸学区全体のまちづくりルールとして広げていくことを目的としていますが、記述されていない項目につきましては事例を重ねながら、せいいつルールに追加修正して発展させていきます。

今回せいいつ方式の提案において、関係者のみなさんからは「町内会加入のメリット」についての質問を多くいただいています。その度に住協活動や町内会活動の概要を説明しましたが、十分に納得していただくには至っておりません。委員会ではこの「**町内会加入のメリット**」について今後十分な議論を踏まえ、この命題に対する説明責任が果たせるように取り組むことを確認しています。

これからも住民のご協力と積極的な取組により、「せいいつ方式」を定着させ、「**住みごこちのよい成逸学区**」をめざして活動を継続していきます。

第2回「ものづくり日本大賞」が発表されました

京都事務所／高野 隆嗣・松田 剛

近畿から19件が受賞の栄誉

今年8月、第2回「ものづくり日本大賞」の受賞者が発表され、近畿2府5県からは内閣総理大臣賞1件、経済産業大臣賞2件を含む19グループが栄冠を勝ち取りました。全国で約7百件、近畿だけでも125件にのぼる応募のなかから選び抜かれただけに、わが国のものづくりや伝統的な匠の技を代表するみなさんばかりです。近畿ブロックの選考をお手伝いさせていただき、経過と受賞者の姿を垣間見た感動を、わずかですがご紹介したいと存じます。

ものづくり人材の顕彰を目的に

「ものづくり日本大賞」は、わが国の産業・文化の発展を支える「ものづくり」を着実に継承・発展するため、製造・生産の現場の中核を担う人材や、伝統的・文化的な技を支える熟練人材など、ものづくりに携わる各世代の人材のうち、特に優秀な人材を顕彰すべく、平成17年にスタートしました。経済産業省、国土交通省、厚生労働省、文部科学省の4省が連携して2年に一度開催され、今回が2回目となります。

製造・生産プロセス部門、製品・技術開発部門、伝統技術の応用部門、海外展開部門、青少年支援部門の5部門に分けて、他薦により応募が受け付けられます。全国9ブロックに分けて第一次審査が行われ、各ブロックで絞り込まれた候補者について東京で第二次審査の結果、内閣総理大臣賞、経済産業大臣賞などが選出されます。

内閣総理大臣賞は福井市・(株)秀峰の名物社長

近畿から栄えある内閣総理大臣賞に輝いたのは、福井市は(株)秀峰の村岡社長のグループです。携帯電話や眼鏡フレームなど、球曲面への高精度な印刷・表面処理を施す同社の技術は、転写フィルムを介して写し取る従来の印刷技術とは次元の異なる匠の技として、特に高い評価を得ての受賞となりました。

村岡社長は地元信用金庫勤務を経て32歳で創業、「無料検眼サービス」を武器にした眼鏡販売で成功したものの、問屋の圧力で仕入れが出来ずに1億円の借金を抱えられました。再起をかけて開発した、目の体操を行う伝説の眼鏡「アイプロテクション」が大ブレイクするものの、代理店のトラブルで再び奈落の底へ。

3度目の挑戦が結婚式用ギフトとして「招待客の顔写真を印刷した杯」を製造・販売するアイデア。ところが「曲面に印刷は出来ない」というのが当時の「印刷業界の常識」でした。悩んだ末、自ら印刷機械の開発に取り組むことを決意。家庭用小型印刷機（プリントごっこ）の原理しか知らないレベルか

（株）秀峰　村岡社長

（株）秀峰の特殊印刷技術の例（製品写真）

らスタートし、毎日研究に明け暮れておよそ一年後に球曲面への特殊印刷技術を開発したそうです。

「まだまだ印刷でやれることはたくさんあるはず。極限まで苦しみ考え抜くとヒントが生まれる。早朝５時頃のヒラメキにハズレはありません」と村岡さん。波乱万丈の物語の主人公が創意工夫の中から得た会心の笑みです。

経済産業大臣賞は真空複層ガラスと金属光造形金型製造法の２件

経済産業大臣賞受賞の１つ目は、真空複層ガラスを開発した京都市・日本板硝子(株)の皆合(みなあい)さんのグループです。従来の耐熱･保温ガラスは、その断熱性･保湿性を確保するためにガラス幅が厚くなり、既存の住宅用窓枠サッシに対応出来ませんでした。皆合さんたちが開発した技術は、真空の持つ断熱特性を応用し、厚さわずか６mmの超高断熱ガラスを商品化したものです。

経済産業大臣賞受賞の２つ目は、金属光造形の技術を用いた金型製造法を開発した門真市・松下電工(株)の吉田さんのグループです。生産工程に必要不可欠な基盤技術である金型の世界で、金型製作に係る日数・コストを１／３に低減しながら、複雑な内部構造を持つ金型も作り出すことを可能としました。

いずれも名の知られた大手企業の開発技術者が中心のグループですが、新しい技術の開発にかけた情熱と執念は、「ものづくりに携わる特に優秀な人材を顕彰する」という「ものづくり日本大賞」の趣旨を体現したものでしょう。

中小企業を中心に優秀賞もツワモノ揃い

紙面の都合もあり、すべての受賞案件を詳しくご紹介することは出来ませんが、中小企業を中心にいずれのグループも個性的なアイデアや技術を有するところばかりです。

・スプレイフォーミング法によるアルミ合金ターゲット材の製造技術の確立（(株)コベルコ科研吉川氏他９名）

・環境低負荷型鋳造プロセス「凍結鋳造型鋳造法」の生産ライン実用化（(株)三共合金鋳造所松元氏他９名）

日本板硝子（株）

松下電工（株）

・印刷技術とwebソフトの融合による業界に先がけた完全無人自動出版システムの開発（(株)フィット藤原氏他４名）
・環境と安全と省エネに優れたDLC厚膜を大型産業製品に広めたイオン注入・成膜技術（(株)栗田製作所西村氏他９名）
・厚膜熱酸化膜付きシリコンウェーハの製品化（ケイ・エス・ティ・ワールド(株)川崎氏他３名）
・家電機器・車載機器の電子制御基板の信頼性を大幅に向上させた高機能性ウレタン樹脂(サンユレック(株)上田氏他５名)
・植物系樹脂塗料の開発と家電製品への応用(シャープ(株)隅田氏他５名)
・フラックスレス及びボイドレス接合を実現した鉛フリーはんだ対応真空半田付装置（神港精機(株)岩佐氏他２名）
・産学官共同成果による「一分間に30万点の高速計測が出来る膜厚測定装置」の商品化（テクノス(株)八重津氏他９名）
・伝統あるアルミ精密加工技術を活かした極微小径穴加工技術の開発((株)中田製作所中田氏他３名）
・緊急災害用の小型軽量可搬式全水域対応型の飲料水製造装置開発（ニューメディカ・テック(株)前田氏）
・ロボカップ世界大会３連覇ロボット「VisiON」の開発と製品への実用化展開（ヴイストン(株)大和氏他６名）
・DDSコンセプトに基づくPLGAナノ複合粒子配合機能性化粧品の技術開発と実用化（(株)ホソカワ粉体技術研究所辻本氏他５名）
・食品素材を原料とした研磨材を使って鏡面研磨加工を可能にした技術（(株)ヤマシタワークス山下氏他７名）
・伝統産業をルーツに薄膜化技術革新を先駆けハイテク製品のものづくりに挑戦（尾池工業(株)井尻氏他６名）
・豊かな表情・紋様のある織物を創出する織物仕上げ加工技術（クラッシュ加工）の開発（播州織工業協同組合竹内氏他５名）

近畿が誇る最高の技と熱き心意気を世界へ！

今回の近畿ブロックにおける選考から表彰まで、審査に係る企業訪問やプレゼンテーション準備、受賞祝賀会、記念誌製作まで一連の作業をお手伝いする機会をいただきました。ものづくり分野の企業を訪問してお話しを伺う機会は、従来から少なくありませんが、審査員のお供で今回お邪魔させていただいた先は、いずれ劣らぬ「自信作」をお持ちの方ばかり。現場でご案内いただき、専門的で高度な内容に驚愕するとともに、審査員の先生方と各グループ代表者のみなさんとの丁々発止のやり取りを前に、目を白黒しながら感嘆したものです。

残念ながら今回は選に漏れた案件の中には、技術内容は素晴らしくても、申請用紙の表現が不充分なため得点に結びつかない案件も少なくないと推察されます。また「ものづくり日本大賞」の存在がまだまだ認知されていないのかもしれません。地域には、優れた技と熱い心意気を持った優れたものづくり人材が、未だたくさんおられるはずです。次回「ものづくり日本大賞」は平成21年の開催予定。更に多くのみなさんが挑戦されるお姿を、今から心待ちにしています。

なお、(株)秀峰の村岡社長に対するインタビューや近畿地域の受賞者のご紹介は、(社)日本機械工業連合会発行「第２回『ものづくり日本大賞』＜近畿ブロック＞」に詳しく掲載しています。近畿経済産業局製造産業課でも頒布されていますのでお問合せ下さい。

近畿経済産業局製造産業課　電話 06-6966-6022

子ども向けエコ住宅ガイドライン
～わたしの家～

名古屋事務所／福井　秀樹

愛知県は環境にやさしい住宅、住まい方を啓発・普及するため、『あいちエコ住宅ガイドライン』を平成15年に作成しました。子どもたちの利用も視野にいれて作成したものの、小学校の先生からはもう少し分かりやすくとの意見があったそうです。そこで、小学生の中学年から中学生までを対象としたガイドラインを県と『環境と共生した住まい・まちづくり推進会議』（事務局：県、アルパック）との共同で作ることとなり、（社）日本建築家協会東海支部や名古屋市立大学で子どもと街づくりについて多くの実践活動を行っている鈴木賢一教授らの協力を得て昨年11月に小中学生版が完成しました。

○編集方針

作成にあたり、鈴木教授をはじめとする作成スタッフは、家や環境と子ども達の関係を考えるところから始めました。家そのものを子ども達が作るということはまずありません。身近なようである意味遠い存在です。そこで技術的なことを解説するより、もっと根本的なところを押さえることとしました。

○導入部分

快適な生活をしている中で、テレビからは異常気象の放送が流れる矛盾を描き、『こんなことでいいの？』という問いかけをしました。次いでこの100年くらいの間に地球環境と人間との間でおかしなことが起こり始めたということを描き、その上で地球と仲良く暮らそうということを語りました。

○家と自然の関係

本論に入る前に、家と自然の関係を見直してみました。もともとの家は地域の素材を使い、地域の気候に合わせて作られていましたが、コンクリートなど人工的な環境が卓越してきて、地球に負担をかけることとなりました。地域の自然を大切にすることが重要であることを示しています。

○家のつくり方・住まい方

子ども達に分かりやすいよう、緑・日・土・水・木・風・火という自然環境を感じさせるキーワードを設け、それぞれに関係する家のつくり方、住まい方へと展開しています。（緑＝緑化　日＝太陽光　土＝地場産材　水＝再利用、雨水利用　木＝天然素材、３Ｒ　風＝通風、換気　火＝エネルギー、断熱）

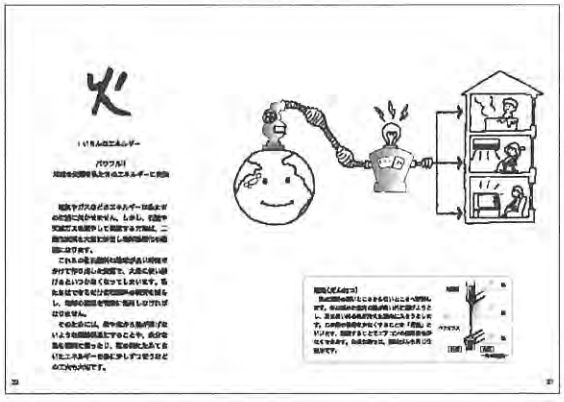
○おわりに

冒頭にあった問いかけの答えとして『私たちは住まいのなかに。住まいは地域のなかに。地域は地球のなかに。地球は私たちのなかに』 つまり、地球はわたしたちの中にあるのではないのという言い方をして締めくくっています。

さて、県ではガイドラインを使った小中学校向けの講座を今年度から始めています。紙芝居風映像や実物の部材を使った内容が小学生の興味を惹いているようです。制作当初から意図していたように、講座の結果を踏まえ、ガイドラインがより良いものへと進化していくことが期待されます。

入手ご希望の方は愛知県建設部建築担当局住宅計画課（電話 052-954-6567）までご連絡ください。直接取りに行くか郵送料負担でお願いします。

例）『火』についての頁



アルパック40周年記念事業

アルパック・タグボート・フォーラムのご案内

爽やかな秋が訪れ、皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

すでにご案内しておりますように、アルパック(株)地域計画建築研究所は、本年40周年を迎えることになりました。1967年2月、京都の吉田山麓で創業して、今日まで、40年にわたって社会の発展と地域の課題に取り組んできました。これからも、住民、行政、専門家の方々と連携し、地域づくりの「タグボート(曳き舟)」としてガンバッテいきたいと思います。よろしくご指導・ご支援のほどお願い申し上げます。

さて、40周年を記念する取り組みとして、「アルパック・タグボート・フォーラム」(関西から、地域再生とまちづくりの新風を吹かそう!)を企画しました。12月8日(土)の午後、大阪の天神橋六丁目にある大阪市立住まい情報センターで開催します。

第1部まちづくり講演会では、佐々木雅幸さん(大阪市立大学都市研究プラザ所長)、中江裕司さん(映画監督)、藤原明さん(りそな銀行地域サポート本部アドバイザー)に、それぞれの立場から、地域再生とまちづくりへの思いを語っていただきます。また、第2部では、地元大阪だけでなく、京都・神戸・東京・島根などから地域再生とまちづくりに取り組んでおられるキーパーソンに現場からの報告をしていただきながら、フォーラム参加者との忌憚のないやりとりを予定しています。さらに、第3部の分野別まちづくり交流会(まちづくり展示)とフォーラム終了後の交流懇親会では、アルパックの所員を含めてフォーラム参加者それぞれが気軽に交流していただければと考えています。

年末の慌ただしい時期ではありますが、皆様方のご参加を心よりお待ちしています。

平成19年11月

アルパック(株)地域計画建築研究所

取締役相談役　三輪泰司

代表取締役会長　金井萬造

代表取締役社長　杉原五郎

40周年記念事業実行委員長　石本幸良

第３期SAS（ソーシャルアクションスクール）開講

大阪事務所／田口　智弘

第２期SASには受講生として(ニュースレター137号でも紹介)、第３期SASにはスタッフ（ボランティア）として参加しています。SASとは、かつてのスーパー公務員養成塾が門戸を民間まで広げて、「関西を良くする」、「日本を良くする」をテーマとして政策立案やビジネスモデル構築を実際のワークを通して学ぶ学校です。具体には、土日の半日又は１日をつかって、前半は著名講師（ボランティア）による主に政策検討に係る講義、後半はグループに分かれて政策立案に向けたワークを行います。カリキュラムの合間にはトレーディングゲームなど全員参加で自己発見と交流を兼ねるプログラムを織り交ぜる、密度の濃い時間を過ごします。第２期の５ヶ月10回のロングランに比べ、第３期は３ヶ月７回と圧縮されましたが、その内容は密度を上げ、変わらない質を維持しつつ進行中です。第３期の第４回では各グループが取り組むワークの成果の中間発表と審査が行われます。第６回の関西最終発表会・審査で見事上位にランクされれば、第７回の全国大会で日本一の栄冠を目指すことになります。全国的な展開は、第２期の北海道、関東、関西、愛媛の４地区開催が、第３期では北海道、関東、東海、石川、愛媛、北部九州、熊本とその裾野を広げ、全国大会を盛り上げるとともに、SASの「全国的なネットワークづくりとリアルな情報交換」という理念の実現に近づけています。

さて、常日頃、業務として政策立案に接する機会を持つ、というよりプロの端くれである私がなぜSASへの参加を決意したか。最たる理由は先のSASの理念の一つである「全国的なネットワークづくりとリアルな情報交換」でした。しかし、第２期のワークでは、地方公務員１、学生２、民間１（私）の、半分は初心者という状況のなかで、政策とはなんぞや、関西の現状は、わが国の現状は、という根本から議論が始まり、プロの端くれとしては非常に歯がゆい思いもあったわけですが、視点を変えると市民の目から見た政策づくり、それを支援する専門性の役割がよく見えたシーンであり、思わぬ成果を得ることができました。今回第３期にスタッフとして参加した理由は、視点をさらに変えて受講生の目とスタッフの目を比較したい、という思いが浮かんだからです。鳥の目、虫の目、魚の目に例えられる視点を変えた思考をSASの場で体感するわけです。

さらにもう一点。最近、長年乗り続けていた中型バイクのステップアップを図ろうと大型二輪の教習に通い出しました。そこではスラローム、一本橋、波状路と通常走行ではあまり遭遇することのない低速バランスに重点をおいた基礎をみっちり仕込まれます。普段は軽んじているニーグリップの重要性やリアブレーキの意外な効用など、20年近く培ったと思われた運転テクニックを根本から見直す機会となりました。SASの体験はそれに似た効用もあるように感じます。この齢にして基礎に触れる機会の妙は実に感慨深いものがあります。

釈迦に説法ではありますが、視点を変えること、基礎に触れることを様々な機会の中に見出してみてはどうでしょうか。大げさかも知れませんが、何かを感じた次の日から生活の視点が一変すると思います。

現在、第３期SASが開講中です。ワークのメンバー参加申込みには間に合いませんが、一時聴講を受け付けています。会場費や講師の交通費に充てる費用を参加費としてご負担いただくのでタダというわけには参りませんが、下記のブログに興味ある講義を見出していただけましたら、是非お申し込み下さい。

第３期ソーシャルアクションスクール関西地域
http://sas-kansai03.cocolog-nifty.com/

「我々のふるさと、ここにあり！」We are here!

大阪事務所／森岡　武

須の谷村の風まつり

事の発端（石見銀山から）

年度末も慌ただしい３月、(株)石見銀山生活文化研究所・松場大吉代表から一本の電話。「まちづくりを手伝ってくれないか？」。激務で忙殺される時期に、なんとも懐かしいお声掛けでした。

場所は？

豊岡市竹野町須野谷。

豊岡市街地から西へ車で30分程、山間の16軒の集落です。現場に初めて足を踏み入れたのは雪解けを待っての５月の連休明け。なんとも心地よいごく普通の集落です。

課題は？

２年前から、まちおこしで始めた「須の谷村の風まつり」。主催者である地元の大庄屋・富森氏と話しをすると、課題は、“住民の理解”と“地域の魅力探し”でした。私の役割は、“あいさつ運動”と“余所者･馬鹿者･若者の一人三役”と“続けるための仕掛け”です。

住民の理解を求めて

現地調査も兼ねて、逢う人逢う人に挨拶して回りました。といっても16軒しかない集落。怪しい都会の若僧と親しまれるのにそんなに時間はかかりませんでした。

地域の魅力探し

朝起きて朝日を浴びながらの散歩。霧が徐々に晴れ、水が張られた田んぼから湯気が立ち上がるのを見てほくそ笑む。携帯電話の電波が全く届かないここには機械音が少なく、聞こえてくる音は自然そのもの。余計なものが何もない、とんでもない魅力資源です。

何にもない豊かさに気づく旅

今回のまつりでかかげたコンセプトフレーズです。

村人に声をかけると「何にもない」って自信なさげ。でも､「何にもない」ってすごく豊かなことなんですよ。今の世の中、無駄なモノが多すぎると思いませんか？人間生きていく上で必要なモノって、おいしい水に空気に・・・人付き合いに・・・自然や季節との語り合いに・・・。沢山あったらみんなで分け合って、余ったらお返しする。感謝の気持ちを忘れない・・・。「何にもない」って、人が生きていく上で一番大切な感覚を純化させる装置なんですよ。

ここでしか体験できないことです。気づいた人は大きな声で叫んでください。「こんな豊かな空間を残してくれてありがとう」、「今度お礼に手土産持って、また来るよ」って。

続けるための仕掛け

まちの変わった見方、楽しみ方の色んなパターンを目に見える形にして、お土産に置いてきました。

○音と風の視覚化（五感を刺激）

駐車場を少し離れた場所にしてメイン会場まで歩いてもらうことにしました。時間によって変わる風向きとにおい、豊かな音に気づいてもらうために。

○何気ないまちなみの魅力化

石見銀山からやってきた鉄の作品・十六羅漢。16軒の軒先に鎮座してもらいました。羅漢さんに視線を向ける、まちの見え方が変わる一瞬です。

○会話の誘発

度あるごとに、まちなかをウロウロし、出逢う人に声をかけたり、カメラを向けて写真を撮ったり、川に入ったり、木に登ったり、私自身が楽しむ姿を見せました。帰り際に地元の方から「来年はもっと早くから準備に入ろうよ」

＜須の谷村の風まつり期間＞

６月２日(土)～６月４日(月)

須野谷の風景　右手前：ギャラリー風来

須野谷のおばあちゃん

写真上：十六羅漢　下：ギャラリー風来

葺き替え前

葺き替え後

田舎の力こぶ・プロジェクト「茅葺き屋根葺き替え」

事の発端（熱い想いから）

「茅葺きの屋根、どうにかならんか？知恵を貸してくれ。」江古花園の元会長、芦田晴美氏からの相談は２月のセツブンソウ祭りの時でした。

場所は？

丹波市青垣町東芦田。

丹波市第１号の登録有形文化財。兵庫県下では珍しい２階建ての茅葺き民家の魅力はその大きな屋根です。（ニュースレター135号に関連記事を掲載）

課題は？

茅葺き職人さんに屋根診断をお願いしたところ、「台風の時期までもたないよ」と言われました。最近の突風やゲリラ豪雨が原因かどうかは定かではありませんが、こちらが考えていた以上の速さで老朽化が進行し、当初の資金計画が間に合いませんでした。私の役割は、“お金集め”と“続けるための仕掛け”です。

お金集めって、関わりづくり？

資金がないのに、工事を決断。“お金集め”なんとも難しい命題です。頭を悩ませた結果、いろんな人の力を借りられるよう“関わり方”を整理しました。それぞれが、それぞれの立場で、それぞれの力を発揮する。社会の利益が個人に還元されるといった感覚的なアプローチをとりました。

“関わり方”

国には、文化財保存に関する助成金申請。県は、景観条例にもとづく景観形成重要建造物指定から事業補助金申請の入口を整備。丹波市は、独自事業の検討。江古花園を含む地元では、様々な協力依頼。その他の方々へは、募金を呼び掛けました。様々な社会の構成員に「自分が出来る事」を意識してもらうイメージ戦略をポスター等により展開しました。

金は天下の回りもの

結果論かもしれませんが、葺き替え工事に総額600万円。１／３を兵庫県、１／３を募金、残りの１／３を所有者と地元有志で負担する事で事業費を捻出しました。所有者負担を極力押さえることができました。

続けるための仕掛け

地域に残る貴重な文化財をみんなで残し、みんなで活用する取組も、葺き替え工事にあわせて取り組みました。

○叡知の結集

いろんな方々に助けを求めた結果、多様な知恵とお金と労力が集まりました。

○参加型の工事現場

職人さんは嫌がりましたが、貴重な屋根葺きの作業が見られるよう積極的に工事現場を公開しました。足場を少し大きめに造り、屋根に上がれるようにしたり、カメラの撮影ポイントを決めたり、室内にも入ってもらいました。

○会話の誘発 cafe　genten

「人が暮らしていく原点が茅葺きの下にあります。」20代半ばの所有者の言葉です。

工事期間中日曜日毎に、葺き替え工事中の茅葺き民家でcafeをオープンしました。茅葺き替えの情報を聞きつけて、古民家再生などに興味を持たれた方がたくさん訪れました。

＜足場設置期間＞

5月20日(月)～7月1日(日)

＜茅葺き葺き替え期間＞

5月22日(火)～6月24日(日)

■ We are here ！

関わった方全てが個の利益ではなく、社会の利益を求めた結果、地域経済が回り出す。この二つのまちづくりから多くのことを感じ取ることができました。

この二つのプロジェクトが終わってから数日経った6月27日に、石見銀山は「環境との共生」をテーマに世界遺産登録されました。「We are here！」は、その石見銀山・大森町で16年続くまちづくりのメッセージです。我々はここにあり。

今、世の中全般に「I am here！」が蔓延し、色んなところでほころびが出てきているように思えてなりません。まちは、Iが集まるWeであって欲しい。

工事現場公開

cafe genten

まちかど

今、小金井が面白い（その１）

～井戸を掘り、お地蔵さんを街なかに設置～

東京事務所／黒崎　晋司

東京都小金井市は、新宿駅からＪＲ中央線で約30分に位置し、多摩地域の自然や風景が色濃く残る閑静な住宅地です（お隣は三鷹市や府中市）。

この小金井市の中心にあるＪＲ武蔵小金井駅前が再開発されることを契機に、商店街の人たちが、地元商店街の活性化と地域コミュニティの形成を目指した取り組みを行っています。

地下100ｍの深井戸“六地蔵の恵み黄金（こがね）の水”

駅前から続く商店街とその後背に広がる住宅地の間の路地に祭られている“六地蔵”さんの敷地に井戸を掘りました。そこから湧き出た井戸水を市民や各店舗等に提供しています。

井戸水の名称については、広く市民から募集し、1000を超える応募のなかから、“六地蔵の恵み黄金（こがね）の水”に決定。

この“黄金（こがね）の水”は、コーヒーやお酒の水割り、料理や炊飯に適しているだけでなく、顔を洗うと肌がつるつるになった等と大好評で、近隣市からも井戸水を汲みに来る人が絶えません。商店街の和菓子屋さんやパン屋さん、蕎麦屋さん等では、“黄金（こがね）の水”を使った商品も開発しています。

“六地蔵”さんの敷地整備　デザインコンテスト

「“六地蔵”さんの敷地を近隣の住民が交流し、憩える場として活用しよう」ということで、次の年には、商店街で敷地の整備を行いました。

整備にあたっては、市内の大学（東京学芸大学と法政大学理工学部）の協力を得て、学生たちに敷地整備案のイメージパースや模型の制作を依頼。応募のあった模型など約20点を、商店街のお祭りの際に展示して、当日の来場者による人気投票を行い、コンペ方式で整備案を決定しました。

自分の作品を来場者に一生懸命アピールし説明している学生たちの姿は真剣そのものでした。（優秀作品には商店街の商品券をプレゼント。）

来街者の増加　住民どうしの交流

こうした取り組みが評判を呼び、NHKの番組「おはよう　日本」をはじめ、ＴＶや新聞・雑誌等の取材を受け、遠く埼玉県や山梨県などからの来街者も増えつつあります。また、“六地蔵”さんの敷地では、子どもたちが遊んでいる傍で高齢者どうしが会話している光景も見られ、地域住民に愛される大切な場へと育ちつつあります。

※お地蔵さんの設置や商店街のイベントについては、次号以降につづく。

写真上：敷地整備デザインコンテストの様子
写真下：ＮＨＫ「おはよう　日本」のＴＶ放映中の取材

アルパック(株)地域計画建築研究所

http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　社
京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見1-4-70 住友生命OBPプラザビル15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478
名古屋事務所　〒460-0003　名古屋市中区錦1-19-24 名古屋第一ビル8F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760
東京事務所　〒160-0001　東京都新宿区片町1-20 萩原ビル3F　TEL(03)3226-9133　FAX(03)3226-9560
九州事務所　(株)よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128